

ハンパ者

奨励	浅野 献一〔あさの・けんいち〕
奨励者紹介	日本キリスト教団室町教会牧師

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあるうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

(マタイによる福音書 5章43―48節)

悪人にも太陽、正しくない者にも雨

僕は「ハンパ者」です。
何か言うにしろ、行うにしろ、あいまいな自分がいることを常に感じます。昔から何か始めようと、自分的には堅く決心してやりはじめても、中途半端に終わってしまう。勉強するための参考書ばかり、音楽への憧れがあっても、楽器ばかりで、おかげさまで懂れるだけで終わってしまう。ですから今日の聖書箇所でも、「完全な者となりなさい」(48節)と言われると、本当に「しんどいなあ」と思ってしまうような者です。
それでも今日、この箇所を共に味わいたいと思った理由は、「こんなハンパな者でも生きていいんですネ」と、この言葉から励ましと力を得ている者の一人だからです。

「父(神さま)は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」お方であるというこの言葉を考えるとき、全くの不公平さを感じざるを得ないそんなあなたは「普通」の感覚をもっています(普通とは何か、という問いは、考えなければなりません)。でも、僕のような「ハンパ者」は、この普通(この世の常識・常識的)に考えれば、不公平な言葉にこそ、安心と慰めを感じます。「生きていってもいい」という勇気を与えられるのです。

にもかかわらず与わるいのち

「しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」(44―45節)。
こんなことを聞くと私たちはすぐ思ってしまう。「友達を愛せやったら分かるけど、敵を愛せと言われても、そりゃ無理や。大体、神様は悪人にも善人にも公平だと言うんだったら、正しい人は馬鹿ばかり見るんちゃう。悪人にも恵みは与えられるんだったら、善人になるだけ損やんか」。そのように思ってしまう。「敵を愛せよ」なんて言っているイエスという人は、世間知らずの理想主義者だったのでしょうか。
僕はそうは思わないのです。むしろ逆にイエスという人物は、人間が自分のことしか考えない、欲望の塊り的な存在であることをよく知っていたのだと思います。自分には限りなく甘く、他人には限りなく厳しい。また表面的には規則や決まりを守って正しい人物と自他共に認めている、そのような人の心の内には、取り去りがたい傲慢が巣くっている場合があることを、よく知っていたのがイエスだったと思うのです。だから徹底的に人間それ自体を掘り下げていくとき、実は真実に「正しい者はいない。一人もない」(ローマの信徒への手紙3章10節)。言ってしまうえば、みんな「正しくない者」となると、深いところで人間の真実の姿を見抜いていたのがイエス、聖書なのだと言えるのです。
つまり「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」ということの意義は、そのような正しくない人間(すべての人)をすら、神は生かし続ける。また、正しくあることができない存在なのに、それにもかかわらずいのちを与え続けるという、ドデカイ神の愛というものが言われているわけです。

愛すること好きになること

また、この言葉は、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(44節)という人の身にとっては不可能とも思える言葉のなかに置かれています。
そもそもマタイによる福音書の5章には、生身の人間が真剣にその言葉を受け取ろうとするとときには、とてもとても実行不可能な言葉が並んでいるわけです。「腹を立てるな(つまり平静を失ってはならない)」(21―26節)。普段、すべてに平静ではられない自分がいる。というよりもいつも怒っているわけです。「復讐したらアカン(復讐の権利も放棄せよ)」(38―42節)。何かされたり言われたりしたら、仕返しを何倍にも返してやりたくなる(倍返し、10倍返し、100倍返しだ、と言いたくなる私)し、せめてイヤミの一つでも言い返したくなる。それがこの「ハンパ者」の自分の姿です。そして、その極めつけのように「敵を愛せよ」と言われる。そんなことは「とうてい、無理、ムリ」と思ってしまう。「仲間(仲間でも愛せるか?)」ならまだしも、敵をだなんて」と思ってしまう。
しかし公民権運動を指導し、非暴力をつらぬいたマーティン・ルーサー・キング牧師はこういう言葉を残しています。

「ある種の人々を好きになることは、かなりむずかしいことである。人を好きになるということは、感情の問題だからである。あなたの家を爆撃するような人間を好きになるのは、至難の業だと思う。また、あなたの子どもたちを脅すような人間を好きになるなど、容易なことではない。公民権を無効にしようと、来る日も来る日もやっきになっている国会議員を好きになるのは、むずかしいことである。しかし、イエスは、そのような人々をも愛しなさい、と言われていた。愛することは、好きになることよりもすばらしいことである」(コレッタ・スコット・キング編『キング牧師の言葉』日本キリスト教団出版局 1993年)。

「ハンパ者」への応援歌(エール)

「愛」って、暖かくてほんやりした感情であるよりも、むしろ相手に具体的に身を投げ出していくものかもしれません。敵をすら、愛する。
でも僕は、愛に徹しているかと言われたらば、やっぱり徹しきれない「ハンパ者(正しくも、善人でもない者)」です。なあなあで、あっちに付いたり、こっちに付いたり、フラフラ揺れ動いている。そのことで人も傷つけ、自分も嫌になるハンパ者です。でも、こんな者でも神サマ(=愛)は、生きて、愛に生きる機会(チャンス)を毎日のように与えてくれている。
「悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」神サマ。それこそ真実の愛。その愛に生かされている「ハンパ者」は、いつか、僅かにも愛に生きたいと、今日も願うのです。
最後にTHE BLUE HEARTS(ザ・ブルーハーツ)の「チェインギャング」を一緒に聴きたいと思います(一部分のみご紹介しします)。

チェインギャング
作詞・作曲：真島昌利 編曲：THE BLUE HEARTS

過ぎていく時間の中で ピーターパンにもなれずに
一人ぼっちがこわいから ハンパに成長してきた
なんだかとても苦しいよ 一人ぼっちでかわまない
キリストを殺したものは そんな僕の罪のせいだ

生きているってことは カッコ悪いかもしれない
死んでしまうという事は とってもみじめなのだろう
だから親愛なる人よ そのあいだにほんの少し
人を愛するってことを しっかりとつかまえるんだ